

野間宏全集

第四卷

野間宏全集

第四卷

筑摩書房

野間宏全集 第四卷

一九七〇年六月十日第一刷発行

著 者 野間宏

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一一七六五一（代表）
郵便番号一〇一―一九一
振替東京四一二二三

本文印刷 暁印刷株式会社
製本 和田製本工業株式会社

目次

真空地帯

兵隊について

“真空地帯”について

『真空地帯』の意味

『真空地帯』と民衆の芸術の力

日本の軍隊について

私の戦争文学

俗情との結託

野間宏『真空地帯』

『真空地帯』について

解説

大西巨人

多田道太郎

杉浦明平

兵藤正之助

3

321

325

328

330

331

342

350

373

388

393

真空地带

第一章

一

木谷上等兵が二年の刑を終って陸軍刑務所から自分の中隊にかえってきたとき、部隊の様子は彼が部隊本部經理室の使役兵として勤務中に逮捕され憲兵につれられて師団司令部軍法會議に向かったときとは全く變つてしまっていた。彼は二年前軍隊にはいつてからはじめて巻脚絆をつけるとなく衛門をつれ出されたが、巻脚絆も帶劍もつけていない代りに上衣の下に隠した両手に手錠を、その腰に捕縄をつけた身体をふって見上げた衛門横のボブラの木はいまでは切り倒されていた。彼と共に入營した現役兵は大半中支へ渡ってしまったっており、部隊には次々と召集された幾種類もの補充兵の他に第一回学徒出陣兵がはいっていた。彼が入營した日身体検査のあとで内務班で支給されたパンも、彼が刑務所で炊事囚として土曜日、祭日につくらされた饅頭も部隊には見えなかった。勿論彼もまた同じようにこの期間のうちに非常に変つてしまっていた。ただだんに彼の肩の上には以前のつかっていた星三つの肩章がなくなっているというだけではなく、もっとも自分の肩の星が三つか

ら二つに減ってしまったということは、木谷に、腕の骨をぬきとられたような感じをあたえたのだが。

朝はやく石切の刑務所から護送自動車で送られてきた木谷一等兵が刑務所看守と共に控室で釈放時間をまつているとき、軍法會議警手とともにはいってきた出迎えの中隊人事係准尉は、彼の不在中他部隊から転任してきたらしく、彼には全然見おぼえがなかった。そして准尉の後についておずおずとはいってきた星二つの引率兵は見るからにひょろ高く、帯革の下服は幾重にも襷がよっていて、いかにも不恰好な兵隊だった。……すでにこのような場面には、たびたび出くわしていた人事係准尉は、別にこの師団司令部の建物や出入りする法務官や廊下にちらつく手錠の輝きなどにおびやかされなかったし、自分の眼の前にあられるはずの刑余者について先日來報告書類を十分研究してあったのだらう、いくらか無頓着な顔をつきつけて一べつした。木谷の頭は瞬間、反射的にたれた。しかし彼は警手たちがはいってくるや当然のように態度をかえた看守に対する怒りでいっぱいだった。

看守はつづけていった。「なあ、木谷、しっかりやれよな……。もう、これまでのような気は、どんなことがあつたて、ぜったいに起こすんじゃないぞ……」彼の皺の寄つた年寄のようにしなびた感じの鼻は、上の方に引きあげ

られていた。「なあ、——いいかい？」それは二年もの間移動することなく、同じ刑務所にとどまって刑をうけてきた囚徒兵の前では、看守が口にするのできるような調子ではない。看守が刑務所内で官品を着服するためには、絶対に古参囚徒の協力が必要であった。木谷一等兵はこの一見寛容でいて、しかも厳格、そしてその本当の内容は狡猾という看守の手本のような男が、木工材料を自分のものにせしめるために選んだ協力者だったのだ。看守は長い曹長剣をならした。

若い警手は看守の方を見向きもしなかった。彼は身輕に木谷の身の廻りを一巡して見てやった。彼は黒い腕被^{わづ}いをしていて、神経質な顔をしていた。「さあ……よし。もう、手錠はとってもらったんだね……つらかったろう。領置品は……よし、もらったな……。じゃ、すぐ、つれてかえってもらいたい。……中隊へかえってからの注意はささ言っておいたとおりだぜ……もう、くりかえしはしないけど。」彼の指は細く胸の上あたりでよく動いた。「もっと散髪はていねいにしてもらわないのかなあ……今日は隊にかえるんだからな……」

「さあ行こう……」看守にいてい重な挨拶をすませた准尉は、木谷が兵隊のもつてきた帯剣をつけ終ると言った。彼は控室の奥にある網をのぞいていた兵隊をよん

で、最後に儀礼のためのように、警手から「部隊にかえった当分の間は食物に注意してやってほしい。……刑務所の給与は量が規則できまっているから腹が一定していたが、刑が終って中隊にかえると不規則になって腸をこわすものがあるから。」という注意をききとった。木谷は、そのような温和な准尉の態度から、その人間をどう判断していいかわからなかった。しかし、人事係准尉という位置が彼には恐ろしかった。これは彼が取り入れなければならない人間だった。

彼等は大坂城のなかの幾つもの城門をぬけて歩いて行った。准尉は部隊の敬礼をとるのが面倒なので二人からいくらかはなれるようにして歩いた。そこで引率の内村一等兵は、軍隊礼式令を幾度か頭の内て整理するかのようなあぶなげな号令をかけて、歩調をとった。「歩調とれ。頭あ……右……直れ、歩調止め……」

木谷は歩調を取って頭を右に向け、向うからやってくる軍刀の将校に注目した。彼は次々とすれちがう上官たちの眼が、じっと自分の身体を見守っているのを知っていた。彼は今日もやはり巻脚絆をしていなかったから。彼は帯剣だけを準備して巻脚絆を忘れてきた一等兵に不満を感じた。彼は将校たちの眼が巻脚絆のない自分の足をすくめるのを感じていた。たしかに彼はそれだけで陸軍刑務所出所者な

のだ。

交叉点の混雑で准尉との距離がとおくなつたとき、木谷は引率者に言った。

「おい、お前、いつの兵隊なんや？」

「はい、去年の五月の兵隊です。」

「補充兵か？」

「はい？」

「俺のことをお前知ってるのか？ 隊できかされたか？」

「いいえ……自分は何もまだきいておりませんです。」

補充兵の頬は寒気のために赤かった。彼は物を言うたびに女のように首を左右にゆり動かし、彼が古い兵隊でないということは明らかのことだったが、それはこちらの口調をうけとめる相手の腰の弱い言葉の調子にそのたしかな手応えがある。

「現役はいないのかい？」

「はあ……おりますです。」

「何？……いや……四年兵だぞ……十×年にはいった……？」

「はあ……いいえ……現役の三年兵殿であります……」

「四年兵は一人もいないのか？」

「はあ……一人も、おいでになりません……」

木谷が出獄の時期が近づくとつれて、刑務所のなかで一

番よく考えたことは、やはり自分が原隊に帰った場合、自分を知っているものが一人もいなければいいということであつた。彼は自分の同年兵達が大陸にでて行つたということは、最後に隊長がよこした手紙で知っていたが、或いはそのうちの少数のものがまだのこっているのではないかと恐れていた。

木谷は話しながら、前にいる准尉の方を見つづけていた。背の低い体の大きくない、左右に肩を揺ゆつて歩く准尉。彼のもつともおそれなければならぬのは、隊長と准尉の二人であり、ことに准尉だつた。そしてこれがその准尉だ。

『飲み助じゃない？ こいつはあかん？』と彼の身体は判断していた。固い融通性のない准尉にちがいないのだ……ところが、あの、馬鹿みたいな顔はどういうのだ……准尉は交叉点のところで信号を待って、ぼんやりとどこを見ているかわからぬような眼をして、空を見上げていたが、その顎は、ゆるんだまま前につき出されていた。彼は左横の方からやってきた背の高い少尉に思い出したように敬礼をした。それからふいと木谷の方を突然ふりかえつた。木谷は不意をおそわれたようにぎくつとして、口をつぐんだが、准尉はもう振り向きはしなかった。

准尉は先刻さう師団司令部の控室でも木谷が昨夜から予想していた長々しい説教や、訓話を彼にしなかった。いや訓話

ばかりではなく、ただの短い注意さえ与えようとはしなかった。さらに腰掛けていた木谷が立ち上ってした室内の敬礼に對するまともな答礼さえしなかった。「うーん」と彼は鼻のところで言った。しかし木谷は准尉を固い人間だと思った。木谷の大きな眼は狡猾そうに准尉の頸筋の辺りをちらちらながめた。

「ケー。」衛兵所の控えの兵は一斉に起立しながら、口をあけた。准尉は直立している衛兵司令の方をちらとみて、そちらへ近よって行った。「ホ隊だが、つれて行く……。日々命令廻^{いちまわ}ってきてるだろう……あいつ。木谷利一郎。」

「直レ……、はあ……きています……通つて下さい……休メ。」衛兵司令は向き直って言った。

既に経理室の建物はすぐ右手のところにあつた。そこには木谷の憎しみの交つた思い出がこめられているのだ。

衛門をはいつた引率者と木谷は准尉のうしろにつつたてて手続きが終るのを待っていた。

「よし、通れ。」衛兵司令は改めて、二人に向かつて強い言葉をかけた。准尉は二人の方に顔を振った。「よし、俺といこう……内村、御苦勞……先にかえつてくれ……木谷は俺がつれて行く。」二人は左手の連隊本部の二階へ上つていった。二人は曲りくねつた事務室の一番奥のところまではいって行った。

二

「何だよ……ちょっと、待てんか？」本部勤務者達のぜい沢と誇りであり、各中隊の羨望をそその副官室のお喋りと暖炉とを恋しがって集つてきた勤務者たちに取りまかれていた連隊副官は長い間二人をまたせておいて、時々振り返つた。彼は他のもののもつていないビロード張りの回転椅子に体をくずして腰掛けていた。彼は副官勤務にいかにもふさわしく世俗的で柔和だった。

「ホ隊ですが、木谷利一郎をつれてかえつて来ました。」准尉は声をおさえて繰返した。

副官の前の黒いストーブには火がもえていた。副官は、顔だけそちらに向けて、何も言わなかつた。彼の顔の上には笑いの跡がのこっていた。准尉の後に編上靴^{ヒナジョウ}を右手にもち頭をたれて姿勢をつくつていた木谷は火をみながら、帰つてきたと思つていた。ここは二年前彼が逮捕されて憲兵隊に留置される前につれてこられたところだった。そのとき彼が申告した副官は大尉だったが、いま副官は中尉だった。ストーブの火口の隙間からもれる火をみる木谷のうちには、もはや二年前とちがつて別に恐怖はないのに、警戒心のために肉体的なおびえが生れていた。……左横の事務机の列には曹長たちが体を机の上にのり出して、複写紙を

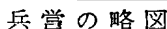
「うん、……木谷だったか。」

「申告だけさせたいと思っておりますが。」

准尉はふりかえって木谷に言った。「木谷、副官殿に申

木谷は一座のものが自分の顔を一度に注視しだしたことに

に気づいた。彼は瞬間自分の顔が、あの監房の四角い窓から飯盒をはこぶごとにつき出される禁錮囚の顔であるよう



な錯覚におそわれた。それらの顔は陸軍刑務所の厳しい監房規則のために、ほとんど変形し、しほみ、脂肪を抜かれていた。木谷は懲役囚で刑務所内で調練をうけていたので、自分の顔にはそのような跡形あとがたはないとよく知っていたが、彼の顔はみるみる熱をもってきた。

「申告します。」

陸軍一等兵木谷利一郎は昭和××年一月十×日付を以て仮釈放となり原隊復帰を命ぜられました……。ここにつつしんで申告します。」

副官はようやく気づいたのだ。これが三日前師団司令部法務部から連絡のあった木谷利一郎であるということ。

彼は力をしばって不動の姿勢を取っている相手の顔をじっとみつめたが、前にのり出した。彼は相手の鼻根部がふくれていて、据っている鼻、厚い少しつき出たインドネシア型の唇、四角い額、ねじれたり、まばらの毛がところどころにかたまっている薄白い頭、などから、一人の罪人の顔を掘り出してこようとしたが、眼をそらせた。

「仮釈放か？」

「はい。」

「何だったんだ？」

「……………」

「何年だったのだ？」

「二年三カ月であります。」

「それで仮釈放でできたのだな。」

一座のものは、いまになってようやく仮釈放という言葉の意味が解つたらしかった。彼らはつづけていた話をやめた。長靴をつけた足をひろげて両手をくんで前につき出していた顔色の悪い動員室の少尉は、ともに木谷の方に向き直った。

「何だったんだ？」

「はい……………」木谷は両手をゆるめてそれをのばした。「懲役であります……………」

「いや……………」そうじゃない……………」何をしたんだったな……………」

「はあ……………」

「その点は、後程、自分の方から報告いたすことにする考えでありますから。」准尉は再び言葉を抑えていった。彼はすました顔をつくっていた。そしてそれが将校たちに対する彼の軽蔑の表現だった。

副官は准尉の方をじっとみた。

「はあ、後程。……………」中隊へつれてかえって、休ませてやりたいと考えておりますから……………」後程、また、連れて参ることに致しますから……………」今日師団の法務官殿の方から御注意がありまして今日は、これを静かにしておいてやってくれと承ってきておりますから……………」准尉の態度は既につつ

しみぶかいものだった。

「副官殿、部隊長殿がちょっときてほしいとおよびであります。」後のドアをあけてはいってきた部隊長の当番兵は、新しい服をきて、新しい襟布えりふをしていた。副官は不可解な顔をして准尉をみたが、「よし」と言った。

「木谷、もう、いい……かえれ……」准尉は副官に敬礼して言った。頭をたれて副官の方をぬすみ見していた木谷は、頭をさらにたれた。が彼はすでにすばやく下においた靴をとりあげていた。彼は自分の後の方で、事務曹長の一人とよびとめられた准尉の話し合っている言葉をきいた。

「准尉さん、立沢はん、あれ、あんたの隊に配属だったか？」

「配属だったとは何だ……。お前の方で勝手に俺の隊にあらんなものをよこしときながら……。ほんまにえらいもんを、かかえこませやがったぜ……」

木谷は本部をでて、經理室前をとり、坂をのぼって中隊へ行くとき、准尉との距離をたえずはかるようにして歩いて行った。

三

木谷は中隊の事務室で中隊長がくるのを長い間待っていた。彼は部屋の真正面の日当りのいい窓ぎわにすえられた

准尉の事務机の前に小さい長椅子をもってきて、頭をたれて坐っていたが、准尉は木谷が入隊後すぐに書いた身上調書を人事係助手の上等兵に出させ、それにもとづいて二、三の書き込みをしたきりだった。

「父親は七歳のときになくなったんだな……」

「はあ、そうであります。」

「すわったままでよろしい。……母は再婚、……保護者は兄貴と……兄さんはお前ができたこと知っているか？」
「知っている筈であります。向うから家の方へ知らしてくれとりますから。」

「兄さんはいそがしいか……鶴見橋……西成区で帽子屋……。お前は兄さんの家にいたんだなあ……地方にいたときには……」

「はあ、そうであります。」

木谷は話しながら再び准尉の肌合いをうかがっていたが、事務室で准尉はのびのびとし部屋中を支配し、おさえ、部屋の空気は彼のところで換流していた。左の窓下の古い明治時代の色塗りのタンスのような物入れの前には給与と金銭出納責任者の曹長がいた。「准尉殿、今日は朝はやくから、出てかれて、おさむうございましたでしょう。こっちはあ……もう、きょう日、気がたるんでしもうて、衛門前で駆け出すこっちゃ。」彼は言った。「いや、なに！」准尉

上げて、火口につっこんでいる。(それは刑務所でも同じことだった。)それに曹長の後にあるあの色塗りタンスは置いてなかった。

四

「フルル……フルルル……」「フルル……フルッ……フルルル……フルル……フル……フル……」事務室のすぐ横で馬が鼻を鳴らし、それから馬の蹄の音が、コッポ……コッポ……コッポ……として急にとまって静かになると「ばかったれ!鉄!鉄!」馬取兵がどなっている。そして隊長室の戸がぱたんとあけられた。

「おい! 当番、当番! あつい茶をくれ! あつい茶を!」隊長は細いのがった声できんだ。狭い部屋のなかをぐるぐるまわって寒さと糲糲とおさえているのが、その長靴のかかと音ではっきりわかる。隊長室は事務室のすぐ向い側にある。そして事務室の空気が変わろうとする。

「おい、当番! 当番! 谷田、谷田はいないのか? いなければだれでもいいから、もってこないか。」

「はいッ。」中隊当番は「隊長の当番とこい行きやがったんやろ」と言いながらドアをあけて隊長室に湯吞茶碗を取りにとんで行った。

准尉は机の下で股を大きくひらいてのんびりしていた。

彼だけが隊長のはこんできた緊張した空気のなかでゆったりかまえていた。中隊当番が隊長の湯吞みにお茶を入れて隊長室にもって行って帰ってきたとき、彼は言った。「さあ……行くかな……木谷……たて……隊長に申告しろ。」

木谷は立ち上ったが、彼は自分の右手、部屋の右側、曹長とは反対の壁のところに席をもっている一人の一等兵が自分の方をじっとみつめていたのに気づいて、ぎょっとした。彼は細い顔をして大きい眼をしていた。木谷は眼をふせた。一等兵は頬づえをついて、じっとみつめているようだった。

「はいります。陸軍一等兵木谷利一郎参りました。」木谷は事務室を出て隊長室にはいつて行ったが、そこには隊長当番のすらりとして一見して粹な(木谷にはそう見えた。)谷田上等兵が来ていて、火鉢に火をつくっていた。

「申告します。」

陸軍一等兵木谷利一郎は……」

しかし隊長当番は木谷の上に重々しくのしかかった。彼の口は動かなかった。

「待て! 当番、谷田、お前しばらく外に出ておれ。」准尉は隊長の当番兵に向かって言った。

当番兵は准尉の言葉の前で小さい反抗をした。彼は隊長の方を見返した。そして彼は「帰ります」と小さい声で言

った。

「申告します。」

陸軍一等兵木谷利一郎は……」

木谷は申告をおわって、まだ大げさにうなずいて首をふっている隊長の方をじっとうかがった。彼の前にはまだ独居房のあの格子戸があるようだった。

「今朝、自分が向うまで行つてつれて参りました。二、三の注意事項もきいて参りましたが、木谷はもう刑をすませた兵だから、どんなことがあつても決して他のものと差別するようなことがないように特に注意してくれとのことでありました。」准尉はしずかに近づいて行つて、力をぬくようにした低い声で報告した。

体の小さく特に足の短い隊長は軍袴ぐんこの胴みのところを特別につくらしてふくらませ、細い袖の上衣をつけ、さらに細い長靴をつけて補っていたがその自然条件をどうするとうわけにもいかないうだった。彼は小さい鼻、小さい眼をした小さい顔をまた大げさにふりたてた。「二、三の注意事項？ よし、わかった。御苦労だった。立沢。よからう。」准尉は微笑した。

「何をしたんだ？」隊長は突然木谷の前にあるき出した。

「何をしたんだ？」

「窃盗であります。衛兵勤務中のことであります。」准尉

は言った。「うーん。」隊長のうなり声は少しばかり大きすぎた。「どこの衛兵だ？」「校方ひょうかた火薬庫であります。」

「誰からとったんだ……」

「巡察の週番士官からであります。」「うーん……」

隊長のうなりはまた少しばかり大きすぎた。木谷は小学校、つとめ先、軍隊、刑務所、あらゆるところで習ったとおり、頭をたれていた。

「第一班へ入れようと思いますが……」准尉は言った。

「班長をよべ。」隊長は言った。

「班長はいま教育中であります。」准尉の声は低くなった。すると彼はやはり隊長を軽蔑しているのだ。

「じゃあ……、あとで俺のところにくるようにいってくれ

……よいか、立沢……」隊長は、顔を前につき出して、兎のように小さい眼を准尉の方におしつけた。准尉は、「はあ、承知しました」とつつ立ったまま言った。

「木谷、木谷だな……もう二度とひとのものをとるなんてことをするんじゃないぞ……、お前その精神をきたえあげてきたか、どうじゃー」

隊長室を出ると准尉は中隊当番をよんで言った。「一班の班長をよんでこい……兵器庫でねているだろう。」

中隊当番は隊長室から三つ目の兵器庫の戸をたたいた。

「誰だ？ 誰もいないぞ」と内から太い声がした。

「吉田班長殿、吉田班長殿。」

「いないぞ——、誰もいないったら……」

「吉田班長殿、准尉殿がおよびです……」

「何？ 准尉殿？ それを、早く言え……それを……当番！ はやく言いなさいようったら。」内の声は甘えたような女の口調になった。

五

木谷は吉田軍曹のあとについて、二階の内務班の方に上って行つた。廊下の銃架には銃が長く冷たく並んでかかっていた。谷間のようにくらいへこんだ部屋には、既に毛布を四つ折にしてたんで置かれた寝台がならんでいた。油の匂い……重い冷たい匂い……木谷はまた帰ってきたと思つた。彼は准尉が自分の傍にいないので自由になっていた。階段を上りきつた右手にならんだ二つの班長室の左手、

一班、二班の班長室で吉田軍曹は事情をきき取つたが、彼は木谷に何年いたのか、苦しかったろう……給与はよかつたか……中隊もかわつたろう……などと簡単なことをきいたきりで、その点にはなるべくふれないようにしていた。彼は班長室のなかをせかせかと机から机へととびまわつた。

「なんだい、仕様のないやろうだな……大滝伍長のやつ。ひとのクリームをだまつてつかいやがつて、あとはほつた

らかしにしてしまいやがる……。あああ、このざまは、……パンにこんなにジャムをぬりたくりやがつて……」隅の机の上にはパンの腹に赤いジャムをねっとりつけた塊がすてであつた。

「まあ、皆がかえつてきたら、身廻り品ももらつてやるからな。」吉田軍曹は机の上の鏡をのぞきながら言つた。「准尉さんも言うてたけど、お前のこれまでのことはな、この隊内には絶対にもらさないことにしてあるから、その方のことは、お前も全然気にかけるな……な……心配な点があつたら、いいにこいよ……な。」彼は鏡から眼をはなさなかつた。「おつ、とつとつとつ……このやろう……。ほんまに……大滝伍長のやつ……。どこへ行きくさつた……とつちめてやらないことには。」

木谷は相手の頬から立ち上るいい匂いをかいだ。軍曹は、その肉の薄い円形の顔に白い色がうき出す程にもクリームをすりこんでいた。彼は額の生えぎわにまるく剃刀をあてさせており、もみあげのところを切りたつようにそりこんでいた。これをみただけで既に軍隊に一年以上いる木谷には彼が下士官のできる限りのわがままをしているというところがはつきりわかるのだ。彼は軍隊のあそび人だ。なまけものだ。軍隊にはときどきこのような訓練とはもつともかけはなれた人間がいる。木谷は吉田軍曹を軽蔑した。しか